

2018年12月3日から2019年2月27日まで、バードライフ・インターナショナル カンボジア・プログラムに派遣され、乾季にオオヅルが飛来するカンポット州 Anlung Pring (AP) とタケオ州 Boeung Prek Lapouv (BPL) の2地域で、農業廃棄物管理計画書策定とそれに関わるワークショップの補助 (AP)、地域住民対象の映画会のマニュアル作成と小学校における環境教育 (BPL) に携わった。

両地域とも川を隔ててベトナムと接する国境地域である。エコツーリズムを推進している AP にはオオヅルが長寿のシンボルとされているベトナムから多くの観光客が訪れている。AP の保護地区は集落の中に位置しており、住民とオオヅルの距離が近い。一方の BPL は漁業が大変盛んな地域で、水路が発達しており、地域の主要交通機関はボートである。それに加え、多くのオオヅルは人間の立ち入りが禁止されているコア地域に留まるので、AP よりオオヅルの観察が難しい。

主な活動

<農業廃棄物管理計画> 農業廃棄物管理計画では、田んぼや周囲の湿地に放置されている有害な農業ゴミを回収、処理する仕組を稲作の始まる4月から導入する予定だ。私は管理計画を練るための現状確認や結果分析に携わることができた。12月には農業散布者とのワークショップ、1月はグラウンド調査、ごみ処理と焼却炉の使用についてヘルスセンターと打ち合わせを行った。

一番印象に残っているのは12月のワークショップである。農業の二次的被害の解説をした後に、防護服着用の有無や、健康状態、廃棄物の処理状況についてグループ調査を実施した。アンケートは事前に担当職員の助言を受けながら作成したが、実際に対象地を歩いてみたり、参加者に地図に表したりしてもらうことで管理プロジェクトの影響範囲をより明確に認識できた。田園地域の様子一つを取っても、日本の田園風景を思い浮かべていたが、水牛の群れが池にのんびりしていたり、牛が放牧されていたりと実際に現場を訪れたことで思い込みを払拭することができた。また、対象者たちに実際に会って話を聞いたことで、それ以来「対象者」が「ワークショップで会ったおじさんたちとその家族」の顔や姿、地域になり、問題を身近に捉えられるようになった。その後新しい人に話を聞く度に対象の精度が高まり、モチベーションが上がったのは勿論のこと、タスクに取り組みやすくなった。言語の壁があり、翻訳がなければ情報がわからない。初めはそんな状況でワークショップに参加する意味はあるのか？とも考えたが、進行具合や参加者の反応などはその場にいなければわからないし、まず対象者に顔を覚えてもらおうと参加した。

<オオヅルのビデオ上映会> 住民対象の上映会は、BPL 周辺の3つの村にプロジェクターとスクリーンを担いで蚊の襲撃を受けつつ夕暮れの野外上映を行った。映画の中盤でオオヅルがスクリーンに現れると観客が息をのむ音が聞こえる。他の動物が出てきたときの子どもたちの喜びようとまるで違う静まり返った会場の集中具合で、地域でオオヅルが特別なのがわかった。私は、渡り鳥が生活の一部になっている日本の里山地域で生活してきた。文化、習慣的には自然に寄り添って見えるが、過疎化、人手不足、放置林や田んぼの問題など構造的に無理が出てきている。つまり今以上に自然に即した社会の在り方のほうが柔軟性や回復力に優れていると考えている。その中で、シンボルとなる生物がいる地域は、自然とうまく調和している一例だと思われた。また、そのような地域では、シンボルの生物を大切に思うようになる過程があるのではないか、人が自然を美しいと思うきっかけをつかめるのではないかと考えながらこのプログラムに参加した。映画会の前には、観客が専ら景品目当てでしか見ないと聞いていたし、実際に景品を用意した時の質問回答率の高さは素晴らしかった。

しかし、年代を問わず皆ツルの場面は何度見ても夢中だったし、幼児はぴたりと動きを止めてスクリーンの右から左に翼の動きを目で追っていた。映画の上映が多くの人にとって自然について考えるきっかけになっているのではないかと感じた。

もう一つ上映会で忘れられないのは、環境教育の授業を受けている BPL の小学 4-6 年生上映会をのぞきに来て、映画を見ていないのにオオヅルや湿地の生態系の質問にすらすらと答えたところだ。小学生の吸収力に目を見張ったのと同時に、BPL の子どもたちがオオヅルを見られる機会があればと強く思った。やはり AP でオオヅルを実際に見られることは大きな強みだ。姿は双眼鏡での確認になるが、家の周辺の田んぼに飛来したオオヅルの声を聴きながら学校に通う AP の生徒と、基本的にはオオヅルの飛来地には近寄れない BPL の生徒の間では、意識が変わってくるのではないか。自分が幼いころ、自然史博物館の講座で博物館の先生方から習ったことを実際に目にしたときの興奮を思い出し、ここで学んだオオヅルのことを BPL の子どもたちに実際に見せてあげたいと思った。

農業有害廃棄物計画のレポートを書きながらもこの思いは止まらず、今ある環境教育の授業をより面白くする方法や、生徒がより教科書のオオヅルを身近に感じられるようなアクティビティを探したり考えたりしていた。そして、環境教育担当の職員に実演や解説をして話し合った結果、最終的に 4 つほど先生たちに提案してもらえることになった。

まとめ

時間はかかったが、派遣期間の最後の方で①子どもへの環境教育②住民に映画を見てもらうというオオヅル保護に直結した働きかけと③住民の健康状態の改善を目的にした農業廃棄物管理の導入という一段階置いた長期的なアプローチなど、オオヅルと地域のために様々なプロジェクトが同時進行しているという構造が分かってとても嬉しかった。環境問題は生態系や教育、経済、歴史などの背景知識を持って複数の立場で考えねばならないこと、それを逆手にとれば、多面的なアプローチが可能なのも再確認できた。カンボジアへ初めての渡航だった今回、国についても環境についても、職員の方々をはじめ様々な分野で活躍する方からたくさん学ばせていただいた。

また、そのような問題に取り組む上で、コミュニケーションの重要性が刺さった。語学力や背景知識の不足にも苦しんだが、それを言い訳にはいけない場面で伝える努力を怠り、たくさんの方に迷惑をかけただけでなく、不快な思いをさせた。挨拶をわすれない。相手の立場でものを考える。わからないことやできないことは後回しにしない。あきらめずに伝える努力をする。仕事でも日常でも基本のきからやり直した。バードライフ・インターナショナル カンボジア・プログラムの職員の皆様が温かく受け入れ、SATO YAMA UMI プロジェクトの皆様が機会をくださったおかげで、特に最後の 2 週間はこれ以上ないほどに充実した。この経験を生かして、お世話になった皆様にそしてカンボジアにいつかご恩返しができるようになりたい。